

聖書：ローマ 15：22～33

説教題：力を尽くして神に祈って

日時：2016年9月11日（朝拝）

15章14節から、この手紙の結びの部分に入っています。パウロはそこで、なぜ自分はこの手紙を書いたのかを、異邦人の使徒としての召命を神から頂いたこととの関係で述べました。その召命に従って、自分はどのように歩んで来たか、過去の歩みについて語りました。今日の22節以降では、これから将来の計画が述べられています。

まず彼が述べていることは、いよいよローマを訪れることができるという展望が開けて来たということです。22節に「そういうわけで、私は、あなたがたのところに行くのを幾度も妨げられましたが」とありますが、この「妨げ」は、これまで見て来た地中海東側世界の伝道のことです。より近い地方での奉仕を果たすために、パウロは行きたいと願いつつも、これまでローマに行くことはできませんでした。しかし今やこの地域の伝道に一区切りをつけることができる時がやって来たので、パウロはローマ訪問に先立ってこの手紙を書いたのです。自己紹介を兼ねながら、自らが神から受けた福音について解説して来たのです。しかしこのパウロの言葉から分かることは、ローマに行くのはそれ自体が目的ではないということです。パウロはさらに遠くイスパニヤにまで伝道に出かけることを志していました。イスパニヤとは今日のスペインのことです。まさに地中海世界における西の果てです。そこに行く途中で、あなたがたのところ立ち寄り予定であるとパウロは言います。そして彼が考えていることは、ただ彼らのところ立ち寄りだけでなく、彼らにスペイン伝道の支援教会になって欲しいということです。これまでのアジアやギリシャの伝道はシリアのアンテオケ教会からの派遣によって進められました。しかしさらに西方イスパニヤまでと考えると、アンテオケからでは遠過ぎます。そこでパウロはローマの教会に是非とも西方伝道の拠点教会になって欲しいと願っているのです。24節に「あなたがたに送られ、そこへ行きたいと望んでいるからです。」とある通りです。もちろんこれはローマの教会を利用するというものではありません。パウロは1章後半で、彼らに福音を伝え、彼らの益に仕えたいと語っていました。その上で彼らが主のヴィジョンを共有して地の果てまでの世界宣教に仕える派遣教会となることは、彼らにとって祝福になることです。そのためにパウロは自分が伝えている福音についてこの手紙で解説して、その福音における一致をもってこの伝道のわがが展開されていくことを願ったのです。

しかしパウロは、その前にもう一つしなければならないことがありました。それはエルサレム教会に異邦人の教会からの献金を持って行くことです。この時、エルサレム教会は貧しい聖徒たちが多いという状態にありました。その一つの要因としては迫害がありました。信者である人たちは住んでいた地を追われ、国外に散って行かざるを得なくなりました。そんな中、エルサレムにとどまっていた信者たちの生活は相当厳しかったと考えられます。それに加えて度重なる飢饉がありました。そういう彼らを支えるための献金を集めることが、パウロがこの時、行なっていた第3次世界伝道旅行の大きな目的の一つでした。彼はその働きを終えて今やエルサレムへ向かおうとしています。しかしエルサレムはローマとは反対の方向にあります。パウロはギリシャのコリントにいて、ローマに向かうには良い場所にありましたが、エルサレムになんか向かったら、遠い遠い振り出しに戻るようなことです。しかしパウロはそのことを優先させたのです。

私たちはここにパウロは自分のヴィジョン達成のために、他のものを犠牲にしたり、見捨てたりする人ではなかったことを知ります。パウロは他の手紙で「もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」と言っています。彼はエルサレムで困窮している信者たちの救援のために、このようにして時間を割き、諸教会を周り、支援金を集め、再びエルサレムに戻ってこれを届けることを優先させたのです。苦しみにある人たちには目をつぶって、ただ自分のヴィジョン推進という道は彼にはなかったのです。

そしてこのことにはより深い目的があったことも続く彼の言葉から分かります。それは異邦人の教会とユダヤ人の教会の一致です。パウロは主に召されて異邦人伝道に仕えていましたが、この新しい展開は従来のユダヤ人を中心とする教会との間に摩擦が生じがちでした。ただイエス・キリストを信じるだけで救われるというパウロの福音は、イスラエルの伝統に従って生きて来たある人々には、正しい宗教からの逸脱に見えました。にも関わらず異邦人の教会はどんどん成長し、今や無視できない勢力になっています。そのよう中で教会はユダヤ人の教会と異邦人の教会とに分裂する危機があったのです。しかしパウロは、この教会の一致のために本当に心砕いた人でした。彼は異邦人教会からの献金を、異邦人の使徒である自らがエルサレムへ運ぶ行為によって、異邦人教会とユダヤ人の教会が主にあって一つの教会であり、一つの交わりに生かされていることを決定的なものにしようとしたのです。パウロは異邦人にはこう教えました。この献金は

愛によって喜んでなすべきものだが、同時にこれはあなたがたの義務でもあるのだ。なぜならあなたがたはエルサレムまたユダヤ人から恩恵を受けているのだから、と。11章 17 節 18 節では異邦人にこう言いました。「野生種のオリーブであるあなたがその枝に混じってつがれ、そしてオリーブの根の豊かな養分をともに受けているのだとしたら、あなたはその枝に対して誇ってはいけません。誇ったとしても、あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです。」 異邦人はお金では決して返すことができない豊かな霊的益を受けました。だからその感謝を、この物質的な贈り物によって現わすべきであると。こうしてパウロはユダヤ人と異邦人の教会の一致を目に見える形で表し、またその一致を促進するための接着剤として愛の献金を勧めたのです。そしてそれを集めた今、エルサレムにまで長い長い旅をし、そうしてからあなたがたのところに向かいたいとローマの読者たちに述べているのです。

さてパウロはこうしてエルサレムへの旅につこうとしていますが、これは決して楽観的な旅ではなかったことが 30 節以降の言葉から分かります。色々な困難や危険が行く手には待ち受けていました。31 節から分かることの一つは、パウロの命を狙う不信仰なユダヤ人たちがそこで待ち構えているということです。すでにクリスチャンたちは迫害されて、多くがエルサレム・ユダヤの地を追われています。そんな中、キリスト教を宣べ伝える第一人者パウロがエルサレムに戻ったら、どうなることでしょうか。まさに飛んで火にいる夏の虫となるでしょう。

また 31 節から分かるもう一つの心配は、このエルサレムに対する奉仕、すなわち愛の献金が聖徒たちに受け入れられるかどうかということです。せっかくこの異邦人からの愛の贈り物を携えて行っても、エルサレムの信者たちが受け取りを拒否したらどうなるのでしょうか。そうしたら教会の交わりは破壊されてしまいます。異邦人の教会とユダヤ人の教会は分裂した教会となってしまいます。これは今後のキリスト教会の成り行きにとってとても大切なことであり、またある意味で心配な材料だったのです。

このような困難な旅、先行き不透明な将来に立ち向かおうとしているパウロでしたが、その彼の姿から私たちが学ぶことは何でしょうか。それは彼が祈りの力により頼んでいることです。30 節：「兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。」 パウロがローマの教会にこのように願ったのは、彼自身がいかに祈りの力に普

段からより頼んでいたかを物語っているでしょう。私たちはここに改めてパウロが祈りの人であったことを知ります。彼は人間的に偉大な人物だったので大きな働きができたのではなかったのです。彼は祈りの人だったので、祈りを通して働く神の力により、大きな働きをなし得たのです。パウロには「肉体のとげ」と呼ばれるものがあったことがⅡコリント 12 章に記されています。それが何であったのかはよく分かりませんが、彼はそれを取り去ってくださいと何度も主に祈りました。そうすればその問題に煩わされることなく、もっと良く主のために働くことができると考えた。しかし主の答えは「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」というものでした。すなわち問題はそこにそのままあって良い。むしろそれがあることによって、益々主により頼み、主に祈ることによって、人間的な弱さやかけを補って余りある主の恵みによって生き、また奉仕することができるということでした。この御言葉によれば、同じように私たちの弱さや苦しみや困難は、実は神の恵みがそこから私たちの人生に入り込むための入口なのです。私たちは祈りを通して、自分の力ではなく、神の力によって生きることができるのです。この祈りを通して、私が持っていない力に生きることができるということこそ、信仰者の特権であり、また祝福です。そしてパウロは自分で祈るだけでなく、他の人にも祈ってくださるようにお願いしています。祈りという恵みの手段に本当に頼んでいるパウロの姿がここにあります。

果たして、その結果はどうだったのでしょうか。パウロとローマの教会の祈りは聞かれたのでしょうか。答えは「聞かれた、しかし予想しなかった方法で」というものでした。使徒の働きにその記録がありますが、パウロはエルサレムに到着して兄弟たちに喜んで迎えられた後、ユダヤ人の暴動に巻き込まれ、捕らえられ、激しく打たれました。祈りは聞かれなかったような状況に陥りました。しかし危機一髪でローマ兵によって助けられます。そして人々に対する演説を試みるも、益々群集は暴徒化するばかり。そんな中、ユダヤ人はパウロを殺すまでは飲み食いしないと誓い合いますが、その情報をパウロのおいが聞き付けて、陰謀が実行される前夜、彼はカイザリヤに護送されます。その後、どうなったのでしょうか。ローマに行けたのでしょうか。何かそこから新しい導きが始まるかと思いましたが、パウロは何と 2 年間、カイザリヤの牢屋の中で待ちぼうけを食わされます。そしてついにローマに行くこととなりますが、それは鎖につながれた囚人としてという方法によってでした。しかも彼が乗った舟は途中で座礁し、難船します。何と私たち人間の考えと神の計画とは違うことでしょうか。私たちはこのことを思

い巡らす時に、祈りについて、また神の摂理について、多くのことを学ぶことができます。私たちは自分が祈り願ったことがその通りにならないからと言って早くに失望してはならない。神の最善の計画は私たちが心に思い図る計画とは大体にして違います。しかし私たちが知ることは、パウロのここでの祈りは究極的な意味で聞かれたということです。この 31～32 節で述べられたことはみな、そのように導かれました。祈りは空しくないので、ですから私たちも祈りの力を信じて祈り続けたいと思います。

ではイスパニヤに行くことについてはどうだったのでしょうか。聖書からはそのことを知ることはできません。しかしローマのクレメンスが、パウロの死後約 30 年頃に書いたコリント人宛ての手紙の中で、パウロは福音を伝えて西の果てまで到達したと記しています。この「西の果て」がスペインのことだとすれば、パウロはイスパニヤにまで行ったこととなります。一方、この「西の果て」はローマのことではないかとする人たちもあり、確かなことは誰も良く分かりません。しかしたとえ結果的にイスパニヤに行けなかったとしても、私たちにとっては問題ではありません。参考になるのはダビデが主のために神殿を建てようとした時のことです。主の御心はダビデではなく、その子ソロモンが建てることでしたが、だからと言って主はダビデを軽んじず、むしろ「ダビデは宮を建てることを心がけて、そのために良くやった。」と言っています。私たちは自分が祈り願ったことがその通りに最後まで達しなければむなしいと考えがちですが、そうではないのです。たとえそこに至らなくても、一生懸命に祈りつつ、主のために取り組んだことを見て、主は「あなたはよくやった」と評価してくださるのです。ですから私たちは自分が願った目的に達するか達しないかですべてを判断するのではなく、そのことを祈りつつ、主の最善のご計画と導きとに委ねて従って行けば良いのです。大切なのは私の心になることではなく、主の御心になることです。主が私のために定めてくださったコースを、主に祈りながら、主に強められて、最後まで走り通すということこそが大事なことなのです。

最後の 33 節でパウロは「どうか、平和の神が、あなたがたすべてとともにいてくださいますように。アーメン。」と彼らのために祈ります。神こそ私たちに平和をくださる方です。まず神ご自身との平和を、次に人間同士の間にも広がる平和を。この平和の祝福に包まれて、彼らが益々成長し、祝福されることを祈っています。

以上、第 15 章の最後の部分を見て来ました。パウロの行く先には様々な困難や課題

があったように、私たちも主の召しを頂いて歩む中で様々な困難や壁にぶつかることでしょう。この週の歩みにもそれは待ちかまえているでしょうし、今月も、この年の残りにも、また来年も、その次の年にもあるでしょう。そんな私たちはどう対処して行けば良いのでしょうか。今日のパウロの言葉から改めて教えられることは、私たちには「祈り」という素晴らしい方法が与えられているということです。この強力な武具が与えられているということです。私たちはこの祈りによって、人の力ではなく、神の力によって歩むことができます。どんなに私自身が無力で、欠けだらけの者でも、「わたしの恵みはあなたに十分である」と主は約束くださっています。私たちは祈りを通して、御心の道を示していただき、神の守りの中で、強められて歩むことができます。そのことを思って、私たちもパウロのように、祈りという神の武具を用いて歩みたいと思います。また他の人にも祈っていただく幸いと力に生きたいと思います。そして神の御力によって、私たちの思いを超える最善に生かしていただき、神に与えられた召命を最後まで全うさせていただき歩みと喜びに生かされて行きたいと思います。